

子どもが嫌がる人形劇

永野むつみ

「楽しかったのですが、ウチの子は途中でちょっとアキてしまったようでした。子ども席から振り向いて「おかあさん」なんて手を振るんですもの」

「そうそう、連られたように振り向いて「帰りにアイスクリーム食べて帰ろうね」なんて言っていたお子さんもいましたね」

観劇後の交流会でのご感想。この日の出し物は『ばばあちゃんのいそがしいよる』（さとうわき

こ原作、松原由利子台本、演出。上演時間十五分）

と、『すえっこねこのルウ』（さとうわきこ原作、永野むつみ脚色、演出。二十五分）。話題になっているのは『ルウ』。

確かに、ついたての後ろで演じていてもその手応え——スツと引く感じがある。でも私は心配していない。たいていすぐに舞台に帰って来る。それに振り向きたい気分は、私にも分かる。観るのが嫌になったのだろう。止むを得ないなアというところ。こんなふうに、途中で観客が「素」に戻ってしま

うような人形劇はダメな人形劇なのだろうか。

子どもは繰り返し嫌い？

『すえっこねこのルウ』は、四人の兄妹妹の物語。もちろん猫の生態を描いたものではない。登場人物を猫にすることで、ある日、あるところで「バラレ ルワールド」となる。両親はでかけていて子どもたちだけで留守番をしている。ルウ以外の三人はそれぞれ家事をまかされている。お姉ちゃんは洗濯、小姉ちゃんは皿洗い、お兄ちゃんは掃除だ。ルウもみんなと同じように手伝いたいのにくましくない。結果としてみんなの邪魔をしてしまう。しかし外で遊んでいなさいと押し出されたルウは、思いがけず大きな魚をつりあげてしまう。汚名挽回。めでたしめでたしというもの。

子どもは繰り返し好きだと言われるが、やはり内容にもよるようだ。

初めに小姉ちゃんと取り合い皿を割ってしまう。

次にお姉ちゃんの干した洗濯物を竿ごと落とし汚し
てしまい、さらに掃除が済んだお兄ちゃんのバケツ
をひっくり返し水浸しにする……。失敗のコラー
ジュ。懲りずに失敗を繰り返すルウにあきれ「もう
止める」「いいかげんにすれば」「ルウはバカじゃな
いの」とまで言い出す。

ヤジの応戦

もちろん「またなんかやるよ。ほうらやった」
「やっばり」とケラケラ笑っている子どももいる。
そういう子どもはルウの何気ない仕草——水に濡れ
た足を拭いてもらうシーンなどで「ルウかわいい」
と言ったりする。間髪を入れず「かわいくなんか
いよ」という声も聞こえる。ルウ擁護派と非難派の
ヤジがとび交う。このやりとりが実におもしろい。
子どもたちの「今いるところ」が見え隠れする。舞
台に心を預けた子どもたちは無防備だ。

「ウチの子、あんなこと言ってる」

保護者や保育者にとっては、舞台上のドラマよりもっと興味深い光景を目にすることもままある。

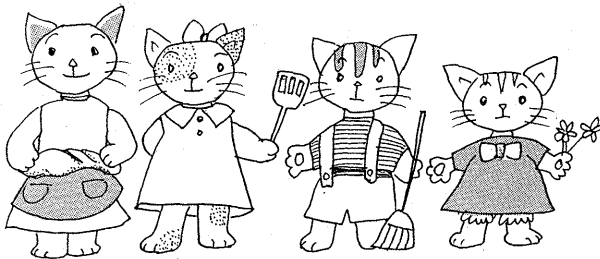
いろんな受けとめ方があっていい。缶詰めだつて上から見ると丸いが、真横から見たら四角いのだ。立場によっていろんな見え方があるということとは知っていてもいい。十人十色。違う考えの人もいるのだ。大勢で観る楽しさのひとつがここにある。

おかあさんはどこ

振り向く子どもはこのあたりで「おかあさん」とやるらしい。退屈なのか。否。確かにアキてはいるのだろうが、ドラマに入りすぎたための結果とも言えないか。つまりこれでもかこれでもかと続くルウの失敗にアキアキした。ハラハラドキドキに疲れてしまい現実に戻りたくなつたというところ。「おかあさん」と呼びかけひと息をつく。母親の顔をみて安心して再び舞台に帰つて来る。こういう見方もあっていい。

むしろ私が最近気になるのは「おとうさんとおかあさんは出かけていて、四人だけで留守番をしています」と紹介して始めたはずなのに「おかあさんは？」と登場を期待する声が増えていることだ。しかも早い段階で。

初演は一九八九年。そのころもあるにはあった。ルウの失敗が三回も続くと、「おかあさんはいないの」「おかあさんはどうしたの」と誰にもなく



▲「すえっこねこのルウ」 カット 山根 裕子

言う子どもはいた。不安な感情をもて余しているのかな、おとなに解決してもらいたがっているのかなと感じた。ところがこのところ、ひとつ目の失敗の後、すぐに「おかあさんは？」とくる。△二場▽でお姉ちゃんが登場すると「あ、あれがおかあさんかな」と。途中でお姉ちゃんだと分かると△三場▽に期待して今度こそ、と思うらしい。明らかに男性の声で歌っているのに「あれがおかあさんなんだ」と言い切る子どもさえいる。

なぜだろう

どうしてすぐにおかあさんなのだろう。子どもだけで決着をつけるなんて思いもよらないのだろうか。解決を急ぐのはなぜか。問題を抱え続けられないひ弱な懐だということか。母親との密着度がますます増していることなのか。失敗は成長のもとだったはず。いずれにしても「末っ子ってなあに」と言う子どもたち、「兄弟」の中に父、母、と

きにはペットまで入れて数える子どもたちが少なくない今、四人の兄妹の物語は、もはや夢物語だということか。

ちなみに原作では、母親も登場していたが作者の了解を得て、子どもたちだけのドラマにした。私は、おとなのいない空間で、子どもたちはどう動くのか、どんなことをどんなふうにするのか、とても興味がある。

まるでボクみたい

この物語は、実に日常生活的に展開する。とりわけ、ルウと三人の兄妹とのやりとりは、セリフの内容も言い方もかなりシビアだ。人形もどこの家庭にもひとつやふたつはありそうな素朴で親しみ易い形、色、大きさだ。それらの人形がホットケーキを焼き、皿を運び、洗濯をし、掃除をする。歌をうたい、言い争いもする。ドラマと言うより生活のスケッチ風。「まるで、さっきまでの我が家です」「あ

の口うるさい小姉ちゃんは、私です」とおっしゃるおとなもいる。いわゆるファンタジックでドラマチックな物語を期待して来た観客の中には、肩すかしを喰ったと思われる方もいるかも知れない。

一方、「あれは人形なんだよ。ボク知っているんだ。下で動かしている人がいるんだよ」と、観劇の途中で突然叫ぶ子どもがいる。初めからそんなことはみんな分かっているはず。わざわざ言葉にする、その心情を思うと愉快だ。人形役者冥利につきる。きつと人形が、まるで生き物のように見えた瞬間があったのに違いない。甦生——これこそファンタジーではないのか。

人形なのに、人形のくせにと知らず知らずの間に引き込まれていく。ウツッコとホントッコの間を行ったり来たり。人間がやったら何でもないことでも人形がやると何やらおかしい。人形のぎこちなさが誇張を生む。人形の動きやもの言いを笑いながら、ふとそこに自分自身を見る。観客がスッと引く

のはそのせいもあるかも知れない。うがった言い方をすれば、人形劇ならではの世界の核心——人形劇の暴露性に、直感的に反応したということではないのだろうか。

子どもが手離して喜ぶ人形劇だけではなくて、途中でちょっと嫌になるのもあっていいのではないかと思うのだが、いかがなものだろうか。

(人形劇団ひばりあむ)

